様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３８３４

研究課題名（和文）世界自然遺産地域における野生生物と地域住民の関係にかんする比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on Relations between Wild Life and Local Residents in World Nature Heritage Sites.

研究代表者
古村　学（Komura, Manabu）

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：１０５４７００３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、野生生物と住民とのかかわりから、地域社会にとっての世界自然遺産の意味を明らかにすることにある。とくに複数地域の比較により、共通性と多様性を明らかにし、地域社会にとっての望ましい世界自然遺産のあり方を考えてきた。
　研究期間全体を通して明らかになったのは、第一に、世界自然遺産登録時における、住民からの拒否反応という共通性であり、その理由の地域ごとの多様性と、地域内部での共通性である。第二に、この地域ごとの多様性が、登録後の地域社会における世界自然遺産の意味の変化を決定づけているということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、これまでに研究蓄積の少ない、社会学の視点からの世界自然遺産地域における野生生物と地域住民のかかわりの研究であるということにある。また、住込みによる参与観察による広範なデータを収集していること、その結果得られたデータをもとに複数地域の比較検討を行なっていること、さらに個人で行なっているため同一視点からの一貫性をもつこと、これらのことも意義深いものである。
　この研究成果は、対象となった地域のみならず、ほかの世界自然遺産地域、野生生物保護地域においても、よりよい自然保護と地域社会の関係を構築することに貢献するものであり、社会的にも意義深いものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is a comparative investigation about relationships of wildlife and local residents in three world nature heritage sites; Shiretoko, The Ogasawara Islands and Iriomote Island, in order to propose better roles of world nature heritage for local societies.
This study examines two points of views. In the first place, when the site inscribed as a world nature heritage, local attitudes have a common ground. Local peoples see the inscription as negative interference. These reasons have local diversity, and local communalities within each local communities. Secondly, this local diversity determine the local attitude changes toward world nature heritage, after years of inscription.

研究分野：社会学

キーワード：社会学　世界自然遺産　野生生物　自然保護　エコツーリズム　知床　小笠原諸島　西表島

１．研究開始当初の背景

欧米による自然保護活動は、住民の存在をマイナス要因として捉え、排除する方向で進んできた。当然のことながら、住民からの反発を受け、非難を受けることなる。現在では、むしろ住民の参加こそが保護活動に有効であると考えられ、地域社会への貢献が重視されている。エコツーリズムは、この考えに沿ったものとしてある（Honey 2008 など）。また、日本の世界自然遺産地域においても、広く導入されている。

このことを反映し、日本におけるエコツーリズム研究では、地域振興へ結びつけるための提案を目的とした実践的・政策的研究が広く行われている。これらの研究の意義は否定すべくもないが、エコツーリズムの「正しさ」が前提となっているため、成功例や可能性ばかりが強調されてしまう。その結果として、当該社会の本来の姿が見落とされてしまう危険性がある。いっぽうで、人類学や社会学において、その社会の実情から、エコツーリズムを批判的に検証する研究がなされているが、質量ともに十分とは言えない（古村 2015 など）。

世界自然遺産地域において、もっとも広く行われているのは、生態学研究である。その野生生物などの貴重な自然ゆえに、多くの研究が、継続的になされており、質量ともに蓄積がなされている。もっとも、これらの研究では、その学問の性質上、地域住民や地域社会、地域を訪れる人びとが扱われることは少ない。扱われるとしても、自然保護のために、コントロールされる対象としてある。

いっぽうで、環境社会学者、人類学者などによって、野生生物と地域住民との研究が、いまだ少数ではあるが、蓄積されつつある。しかし、現状では、日本の世界自然遺産地域における研究は、ひじょうに少ない。そのため、地域社会の人びとが、世界自然遺産をどのようにとらえているのか、そこで生活することの意味などは、不明なままなのである。地域社会重視の姿勢からは、この点は課題であろう。

２．研究の目的

本研究の目的は、野生生物と地域住民とのかかわりを、当該社会の現状に即してみていくことにより、地域社会における世界自然遺産の意味を明らかにすることにある。また、複数地域での比較検討により、共通性および地域の独自性を明らかにする。そのうえで、地域社会における、より望ましい世界自然遺産のあり方について考えていきたい。

対象地域は、世界自然遺産にかかわる三つの地域、北海道知床、とくに羅臼町、東京都小笠原諸島、とくに父島、沖縄県八重山諸島西表島、とくに上原地区である。これらは、2003 年の世界自然遺産候補地にかんする検討会において、環境省を中心に推薦すべき地域として選定された。その結果、2005 年には知床が、2011 年には小笠原諸島が登録されている。また、西表を含む「奄美大島・徳之島・沖縄島北部及び西表」は、2018 年の推薦取り下げ後、再推薦を目指している。報告者は、これまでもこれら地域で、エコツーリズム、世界自然遺産にかんする研究を行なってきた。

これら地域は、固有種や絶滅危惧種などの貴重な野生生物が多く生息しているという共通点を持つ。また、それらの生息地域と住民の生活・生業地域が、近接しているという共通点も見られる。そのため、生活の中での接触も多く、身近なものとなっている。貴重な野生生物というよりも、ある意味では、日常生活の中に埋め込まれた存在、そこに生息しているのが、あたりまえの存在なのである。

これら貴重な野生生物は、世界自然遺産の重要な要素のひとつとしてある。登録にさいしては、保護活動、それらを守るための外来種の駆除活動などが活発化する。そのため、これらの保護活動を目にし、耳にする機会が増えることにより、あたりまえの存在が、貴重なもの、もしくは排除すべきものとして可視化される。この可視化した野生生物への地域住民のかかわり、意識を見ること、さらに登録後の経年変化を見ることにより、地域社会にとっての世界自然遺産の意味を明らかにしていく。

３．研究の方法

本研究では、上記の目標を達成するために、「ふつうの人びと」の日常生活に着目する。この「ふつうの人びと」とは、公的な地域の意見を発信することも、明確な意見を広く発信することもない、生活者としての多くの人びとである。これらの人びとの日常生活の中における野生生物とのかかわり、それにかかわる自然観、これらを理解するために、日常生活全体を見る包括的アプローチをとった。そのために、短中期的な住込み調査による参与観察を主体とする調査を行なった。

研究全体の流れは、以下のとおりである。

（1）傾向と問題点の明確化

先行研究の検討、本研究以前に取集したデータの整理から、現地調査の方向性を決定した。基本方針は、上記の研究目的に記したとおりである。

（2）現地調査

2015（平成 27）年度には、西表島および知床、また比較地域として南大東島、2016（平成 28）年度には、知床および小笠原諸島にて現地調査を行なった。参与観察および聞き取り調査を中心として、世界自然遺産および野生生物とのかかわりや意識に関するデータなどを収集した。とくに注目した野生生物は、知床ではヒグマ、小笠原諸島では外来種であるグリーン・アノー

ル、西表島ではイリオモテヤマネコである。
（3）暫定的な比較検討・理論化
2017（平成 29）年度には、上記の現地調査を通して収集したデータを比較検討し、暫定的な理論化を行なった。そのさいには、調査地ごとの共通性と多様性を明確化し、続く現地調査への指針を立てた。
（4）現地調査
2017 年度には、小笠原諸島および西表島にて、2018（平成 30）年度には、全調査地にて現地調査を行なった。上記の暫定的な比較検討・理論化によって立てた指針に従い、参与観察および聞き取り調査を中心として、データを取集した。
（5）比較検討・理論化
これまでの現地調査で得られたデータを比較検討することにより、調査地ごとの共通性と多様性を明確化し、地域社会にとっての世界自然遺産の意味の理論化を試みた。詳細にかんしては、以下の「研究成果」にて概観する。
（6）調査地域および学会・研究会等での研究成果の公表
現地調査時には、可能な限り、講演会や勉強会、研究会の形で、現地の住民および研究者に向けて、研究成果の公表を行なった。これは、研究成果のフィード・バックにとどまらず、研究を深化させるために重要なものであった。なお研究成果の公表の詳細にかんしては、以下の「主な発表論文等」を参照。

４．研究成果
本研究によって明らかになったのは、世界遺産登録時には、地域住民からの拒否反応が起こったという共通点である。しかし、その拒否反応の理由は、地域ごとの事情に合わせて、多様性を見せている。また、地域内部では同じような反応をする人が多数を占めるという共通点も指摘することができるだろう。ついで、この登録時に示した拒絶反応の理由は、登録後数年たった後の世界自然遺産に対する住民の反応に影響を与えるものともなっている。

（1）知床、羅臼町
知床は、陸と海の関係性による生態系、ヒグマやトド、オジロワシなどの絶滅危惧種の生息密度の高さによる生物多様性が評価され、世界自然遺産に登録された。知床 100 平方メートル運動などの自然保護の歴史により、自然保護体制が整っていることも、評価の対象である。登録後は、知床財団を中心として、保護管理が進められている。
知床の羅臼町では、登録による漁業規制を恐れて、漁師たちは反対をした。羅臼町は、就業者の 4 割が漁師であり、関連産業で働く人も多い、漁師の町である。漁業規制は、死活問題なのである。しかし、自主規制以外の規制はかけないということで、受け入れることとなった。漁獲が減っているために、自主規制をかけざるを得ないという状況であったという側面もある。
世界遺産登録後には、野生生物が増加している。とくにヒグマの出没が増えており、生活や生業を脅かしている。しかし、野生生物の増加を世界自然遺産による保護活動と結びつける住民は少ない。大きな被害が出ていないこともあり、脅威と感じていないことも一因としてあげられる。いっぽうで、漁業被害を引き起こすトドは嫌われているが、こちらも結びつけられることは少ない。今となっては、漁業へ影響のないものとして、世界自然遺産への反対の声は少ない。
この背景には、世界自然遺産に対して、興味や関心がないということがある。知床での自然保護運動は、斜里町で行なわれたものであり、羅臼とはかかわりがない。世界自然遺産になってからの活動も、かかわりが薄いものである。また、期待された観光産業への恩恵は限定的なものとなっている。世界自然遺産登録されてから、10 年以上たつが、羅臼の人びとにとっては、そこに生活しているが、ある意味では、日常生活の中ではかかわりのない、忘れ去られたものであり、反対する理由もないのである。

（2）小笠原諸島、父島
小笠原諸島は、島ごとの異なる環境により、かたつむりが異なって進化してきた「適応放散」が生態系として評価され、世界自然遺産に登録された。また、ほかの陸地から離れているため、独自に進化した固有種、固有亜種が多いという特徴を持つ。しかし、脆弱な生態系のため、侵略的外来種により破壊されつつある。世界自然遺産であることを維持するために、ノヤギ、ノネコ、グリーン・アノールなどの外来種対策が重要な活動となっている。
登録時には、強いものではないが、マイナスの意見が広く聞かれた。小笠原では、観光産業が重要な産業となっているが、多くの観光業者も喜んでいなかった。観光客が増えても一時的なものであること、それよりも客層の変化を恐れていた。世界遺産だから来る人は、二度と来ることはない。それよりも、小笠原が好きだから通っている多くのリピータが、雰囲気が変わることにより離れてしまうことを危惧していた。
さらに、外来種対策にたいする複雑な感情も広く聞かれた。グリーン・アノールは、以前には小笠原を代表とする生物として、旅行雑誌にも紹介されており、店名にも使われていた。それが、今では駆除される対象となっている。小笠原の人口の 8 割は移住者であるが、小笠原の自然が好きで移住した人は多い。その自然は、世界自然遺産が認める貴重な自然ではなく、た

だ美しい審美的な自然である。このことが矛盾を生み出している。
　登録後には、外来種対策に予算がつぎ込まれ、その仕事に従事する人により島の人口は増加している。あらたな産業として、島の経済に貢献しているのである。また、世界自然遺産に関連する講演会や島民向けのボランティア活動などが多数開かれている。もともと自然が好きな移住者が多いため、自然保護活動に積極的であり、参加する人は多い。世界自然遺産であること、それを守るための駆除活動は、生活の一部となりつつあり、マイナスイメージも薄れつつある。

（3）西表島、上原地区
　西表島は、イリオモテヤマネコにより世界的に知られている。この存在ゆえに、世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄北部及び西表島」の一部として推薦された。この推薦は取り下げられたわけであるが、西表島自体はヤマネコの保護管理体制が整っており、問題は少なかった。むしろ、ほかの地域の問題のため取り下げられたのである。
　推薦時に、島内で賛成の声を聞くことは困難であった。だれもが、反対をしていたのである。多くの人から聞かれたのは、観光客の急増による、自然環境の破壊である。また、トイレやごみ処理などインフラの整備不足も聞かれた。観光地におけるオーバー・ユースの問題である。西表島には、観光産業で生計を立てている人が多くいるが、それらの人びとも反対していた。
　この背景には、1990 年代の環境省によるエコツーリズム導入事業がある。この事業と並行して、八重山ブームが起きており、西表島への観光客は急増していった。そのさいには、エコツアーとしてのカヌー業者が乱立し、川はカヌーであふれることとなった。自然を守るためのエコツーリズムであったはずが、むしろ自然を破壊するものとして、マイナスのイメージをもたれたのである。
　また、世界遺産推薦にさいして、このカヌー・ツアーが、ヤマネコのロード・キルと関連づけられて語られるようになった。あらゆる川にカヌーが入っていくために、ヤマネコが人なれしてしまう。その結果、人を恐れずに、人里に出てくることにより、車に轢かれるというのである。真偽のほどは不明であるが、ヤマネコを見かけることが多くなったという。自然保護のための世界自然遺産であるが、エコツーリズムと同様に、かえって自然を破壊するものとして受け止めているのである。
　推薦延期後には、「竹富町観光案内人条例」など、観光にかかわる規制が検討されている。しかし、島の人びとからすると、十分な準備がされることもなく、拙速に推薦が進められているように映っており、行政機関への不信感がぬぐえていないのが現状である。

（4）比較検討
　世界自然遺産登録にさいして、羅臼では主要産業である漁業規制を恐れて、反対された。この規制にかんしては、ほかの 2 地区でも言われている。小笠原では、山に入るのに許可が必要になることも反対の理由として多くあげられていた。もっとも、1 時間程度の講習を受ければ許可証をもらえ、それ以前に、それほど山に入っていない。反対だから、その理由づけとしての言い分としての発言なのである。西表では、イノシシ猟が盛んであるが、それが規制させるのではないかという心配が繰り返し聞かれる。行政関係者によると、今ある以上の規制はかからないと何度説明しても、また聞かれるともいう。こちらも、反対としての言い分ととらえることができる。規制にかんしては、その後の動向を見ても、大きな問題とは言えないであろう。
　小笠原では、貴重な自然と美しい自然、この自然観の違いが反対の根底にある。グローバルな世界自然遺産の自然観と小笠原ローカルな自然観の対立と見ることができる。この点は、小笠原と同様に、その自然ゆえに移住してきた住民の多い西表でも同様な傾向を見ることもできる。しかし、イリオモテヤマネコは島のシンボルであり、世界自然遺産の話とともに、可視化されたことにより保護意識が高まっている。そのため自然観の矛盾は少ない。もっとも、肝心な世界自然遺産による自然保護は、信じられていない。いっぽうで、羅臼における自然とは、豊かな生活を保障する豊饒の海としてある。これは、貴重な自然とは関係づけられてはいない。そのため、無関心が広がっているのである。
　西表では、世界遺産登録によって、観光利用、とくにエコツーリズムという名のもとのオーバー・ユースが反対の理由としてあげられる。小笠原では、マス・ツーリズムは成立せず、すべてがエコツーリズムであるという意識がある。船の定員によって事実上の入域規制がなされているからである。また、自然利用の規制も厳しいこともあり、観光利用による自然破壊は限定的である。羅臼においては、観光産業に対する興味が薄い。漁業の方が儲かるからである。また、世界遺産登録後には、一時的に観光客が増えたが、その後は減少続けており、関心も低下している。
　世界自然遺産登録後であるが、見てきたように、羅臼と小笠原では対照的である。登録後の政策自体は、環境省を中心として、生態学者などの研究者の協力のもと立てられているために、その考え方自体の差異は少ない。しかし、地域社会の受けとめかたは異なっている。この背景には、漁業が重要である社会と移住者が多いという社会構成の差異、そこから発生する自然観の違いが指摘できよう。西表島にかんしては、まだ登録されていいないため、今後の変化を見通すことは困難であるが、懸念される自然破壊が起きることなく、本来の理念どおりに自然が守られていると島民に受けとめられるならば、住民の態度も好転していくであろう。

現在、世界自然遺産にかんする政策決定は、生態学者が中心となって行われている。自然保護のための知識としては、それが有効であろう。しかし、地域社会にとって、より望ましい世界自然遺産のあり方を求めるのであれば、そこには限界がある。とくに現地社会をよく知る人類学や社会学の知見の活用は、いまだ限定的であるが、今後は有効性の高いものとなっていくであろう。

〈引用文献〉

① Honey, M.、Island Press、Ecotourism and Sustainable Development、2008
② 古村 学、吉田書店、離島エコツーリズムの社会学――隠岐・西表・小笠原・南大東の日常生活から、2015

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 古村 学、知床・羅臼におけるエコツーリズム――漁師の町の『豊かな自然』、観光学術学会大会要旨集、査読無、Vol.5、2016、pp.50-51
② 古村 学、西表島の人びとから見た世界自然遺産――世界自然遺産登録が自然を破壊する、観光学術学会大会要旨集、査読無、Vol.7、2018、pp.34-35

〔学会発表〕（計１５件）

① 古村 学、南大東から見る小笠原、小笠原から見る南大東、南大東村青年会主宰勉強会、2015
② 古村 学、南大東から見る小笠原（続）、小笠原から見る南大東、南大東村商工会青年部主催勉強会、2015
③ 古村 学、西表島から見る世界自然遺産、西表野生生物保護センター主催ミニ講演会、2015
④ 古村 学、西表島から見る世界自然遺産、村田自然塾主宰勉強会（西表島）、2015
⑤ 古村 学、アフリカから見る日本離島のエコツーリズム、アフリカ観光研究会、2015
⑥ 古村 学、イリオモテヤマネコをめぐる人々の生活から見る世界自然遺産、グローバル化とアジアの観光研究会、2015
⑦ 古村 学、知床・羅臼におけるエコツーリズム――漁師の町の「豊かな自然」、観光学術学会、2016
⑧ 古村 学、エコツーリズムという言葉の無意味さ、知床ゼミ（知床財団）、2016
⑨ 古村 学、ヤマネコとヒグマ、知床ゼミ（知床財団）、2016
⑩ 古村 学、知床羅臼から見たエコツーリズム、グローバル化とアジアの観光研究会、2016
⑪ 古村 学、ヤマネコとアノール、NPO 法人 One Life 主催講演会（小笠原諸島父島）、2016
⑫ 古村 学、西表から見る世界自然遺産――知床と小笠原諸島の事例から、村田自然塾主宰勉強会（西表島）、2018
⑬ 古村 学、西表島の人びとから見た世界自然遺産、観光学術学会、2018
⑭ 古村 学、世界自然遺産になるとき――西表島、小笠原諸島、知床羅臼から、知床ゼミ（知床財団）、2018
⑮ 古村 学、世界自然遺産になるとき――知床、西表島から小笠原諸島を考える、小笠原野生生物研究会主催講演会、2018

〔図書〕（計２件）

① 宇都宮大学国際学部編、古村 学 他、下野新聞社、多文化共生をどう捉えるか、2018、183
② 大野 哲也ほか編、古村 学 他、嵯峨野書院、スポーツを開く社会学、2019、印刷中

〔その他〕

書評（計１件）

① 古村 学、「書評　石原俊著『群島の歴史社会学――小笠原諸島・硫黄島・日本・アメリカ、そして太平洋世界』」、フォーラム現代社会、査読無、15、2016、pp.116-117

６．研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。